

# 河上肇生誕 三〇年記念講演会

## 河上肇と現代の「貧乏物語」

林 直道 大阪市立大学名誉教授

はじめに



最初に一言、私と河上先生とのかわりについて申し上げておきたいのですが、私が河上先生にお目にかかったのは一度だけでございます。私が今の大阪市立大学、当時の大阪商科大学の学生であった時に、（1942年）河田嗣郎学長が亡くなりました。河上先生は河田学長の古くからの友人でありまして、河上先生が京

大を辞めさせられる時に、河田先生は文部省の圧力に屈服した教授会の大勢を見て表決の日に教授会をサボって投票に加わらなかったということで、あえて抵抗の姿勢を示された人であります。自由主義的な立場を貫いた方でありましたが、その河田学長が亡くなったので、全学生が堺市上野芝のお家の近くの道路際に整列していました。

当時、河上先生は特高警察の監視下にありましたから行動はままならなかったわけですが、特別に許されて上野芝までお葬式にこられました。河上先生が来られる」というわさが学生の間で広がって、みんなわくわくしながら並んでいたのです。河田学長の葬式よりも河上さんが来るということが頭を支配していたわけがあります。目の前を背の高い頬骨の出たよぼよぼの爺さんがずっと通り過ぎただけのことでしたが、みんなすごく感激いたしました。

その当時私たちの大学では反戦運動が地下で行なわれていまして、例えば授業なんかでも「太平洋戦争万歳」というような先生の授業は全員ボイコットでありましていたるところでマルクスを語るといって雰囲気でありましたが、その中で地下組織が生まれまして組織立った抵抗をやるうということになっていました。

ただ目の前を通っただけであつたのですが、河上先生を見た！」とみな興奮して、「この感激をばねにして反戦闘争に一段と奮起しよう」ということになったわけであります。私もそうした一人でありました。このことは大阪市立大学百年史「全学編」上の205<sup>頁</sup>に出ておりますが、新日本出版社の「貧乏物語」の巻末の私の解説の234<sup>頁</sup>にも出てございます。

また、我々の仲間で大阪商大事件でつかまつた山本君という1年上の学生がいましたが、彼のお父さんは大阪刑務所や拘留所を設計した人ですが、お母さんが親父が設計した刑務所に息子が入れられた」と嘆いておられました。この山本君が戦後、豊中から京都に通って河上先生の「自叙伝」の清書をしておりましたが、河上先生とはわずかながらつながりがあつたわけであります。

## I 不朽の名著 河上肇「貧乏物語」1917年 大正6

河上先生のお書きになったたくさんの著作の中でも非常によく読まれたのが不朽の名著「貧乏物語」でありまして、大正6年にできました。戦時中に発売禁止になつておつたのですが、昭和21年に出版した岩波文庫版の「貧

乏物語」の解題を担当された東大の大内兵衛先生が書かれております。その一節に、「この貧乏物語は大正5年、大阪朝日新聞に掲載され数十万の読者の絶賛を拍したものである。今日、初老を過ぎたインテリにしてこのことを記憶しないものはないであろう。そして彼らの内で社会問題について多少の見識を有すると自負するほどの者ならば必ずやこの書によつて開眼せられたことを告白するであろう。ことほど左様に時代の主張に与えた本書の衝撃は大きかったのである」と書かれています。この一言でどんなにこの本が絶賛を拍して版を重ねたかということがお分かりだろうと思います。

河上先生の「貧乏物語」の貧乏という意味は、大間の生存に必要なだけの物を持たない者」、暮し向きに困る者」という意味ですが、以下「貧乏物語」の貧乏とはこういういった意味だと断っているわけです。「この書物の最大の意義は、貧乏の問題が現代社会の最重要問題であることを喝破して、この世から貧乏をなくすることを念願としている」。これを経済学者としての自分の任務として考えられたわけです。

驚くべきは現時の文明國に於ける多數人の貧乏である。・翻つて歐米の社會を觀ると、・英米獨佛其他の諸邦、國は著しく富めるも民は甚しく貧し。げに驚くべ

きは是等文明國に於ける多數人の貧乏である」新日本出版社版13く14頁。

ところが世の中には お金があったら人間怠けてしまうので貧乏の方がいいのだ」というような貧乏礼賛論もあります。ものすごく貧乏であつたら困るわけであり。私も終戦直後、モラトリアムで親父が残してくれた銀行預金が封鎖された時は本当に困りました。あの時の窮状というと大阪の中ノ島の岸に生えているペンペン草を摘んできて食べました。あれを食べたら腹具合が悪くなつて青いウンチがでるのもういやや」といわれましたが、あれを食わなければ腹が減つてどうしようもない、という状態でした。貧乏というのは本当につらいものです。

大はパンのみにて生きるにあらず、されど人はパンなくして生きる能わず」といいますが、人間は食べることや経済のことだけ言うのは浅ましい、人間というものはそんなものではないと言う人もいますが、本当の貧乏になつてからものを言つてもらいたいものだと思います。河上先生は、ごく少数の金持ちのもとへの富の集中と毎日懸命に働いても労働者が安い賃金しか得ることができない、こういうことを貧乏の原因として打ち出しているのがありますが、この時代としては貧乏問題の研究に

道を開いたすばらしい本であります。ただ、河上先生はマルクス主義の勉強は始めていましたが、この本にはかなりあまい見方が入つておりました。それは貧乏の一番大きな原因は、金持ちのもとに富が集中することであるとか、労働者の賃金が安すぎるることとか、そういうこと以上に河上先生が力を込められたのは、金持ちが贅沢をするから生産力が贅沢品の生産にまわされて、そのために生活必需品の生産が足りなくなる、これが貧乏の一番大きな原因である。したがつて貧乏をなくする一番手っ取り早い方法は金持ちが贅沢をやめることだ、というのがこの本の結論です。これは最初に書かれた本としては仕方がないにしても明らかに間違つた考え方でありました。

## II 河上肇 第一「貧乏物語」1930年 昭和5)

河上先生がそれから必死に勉強されて、13年後に著されたのが 第二「貧乏物語」でありまして、この本にはあまい人道主義的な、空想主義的な考え方は微塵もないのであります。

河上先生がマルクス主義を勉強するきっかけとなつたのはライフワークのつもりで出版した 資本主義経済

学の史的発展」(1923年)でありますが、これもまた版を重ねた名著でありました。

この本の中にもこういう考え方が色濃く残っていて弟子であった櫛田民蔵氏が「この本にはマルクスを読んだ人にふさわしくないような間違いがある」ときびしく批判したのであります。自分が結婚の仲人までした弟子からぼろくそに言われた河上先生は大ショックを受けましたが、櫛田氏の批評には善意に欠ける誤解もあるが、よく考えてみると大筋ではあたっている」と愚痴っぽい言い訳は一切言わず根本から勉強し直そうと決心された。旅の塵 払いもあえぬ我ながら また新たな旅にたつかない」と本格的に科学的社会主義の勉強をしようと思い立ち、新和歌の浦にあった一番上等の旅館が望海楼であります。そこに一カ月泊まって気分転換されました。当時の帝国大学の教授というのは余裕があったわけですね。

1960年代に国鉄、動力車労働組合南近畿地方本部がこのあたりで労働学校を開いていましたが、私は常連の講師として毎年行っていました。1958年 昭和33に、あの旅館が河上先生が新たな旅に立とうと決意した望海楼だとなつたしみ、スケッチをしました。この絵が新日本出版社版の本の解説のスケッチ352頁

から353頁に載っています。今ではもうこの旅館街は古くなって建て替えられて当時の姿はありません。

河上先生は徹底的にマルクス主義を勉強されて、貧乏物語の空想的なあまい考え方というものを完璧に克服されました。現代社会における資本主義の搾取の仕組み、剰余価値の説明が詳しく展開されて、さらに経済学の基礎となる史的唯物論、その基礎である弁証法的唯物論にいたる当時としては国際水準を抜くと評価されている科学的社会主義・マルクス主義にかんする全面的な解説の書物が「第二貧乏物語」であります。

その最後のところを読みますと 将来社会では労働は単に生活のための手段でなくなり、むしろ労働それ自身が第一位の生活要求となるに至った時：その時には労働時間はうんと短くまた楽になっていて、もはや勤労はラジオ体操をするようなものでありましょう。：個人の全面的発達と共にまた生産諸力が増大し、そして共同社会の富の一切の源泉が十二分に流れ出して来た時、その時はじめて、社会はその旗の上に 吾人は彼の能力に応じて働き、各人はまた彼の欲望に応じて消費せよ、と書くことができる』その時 貧乏」という文字は永久に人間社会にとって無用となるであろう」と書かれています。新日本出版社版340頁)

そこまで行くには何百年も先のことであろうと思いますが、将来社会を展望されて河上先生は貧乏という問題は人間の歴史の中である「時代の階級社会の産物であり、将来社会では「貧乏」という文字もなくなると書かれています。今日では「貧乏」というとなにか特殊なことのように考えられますが、「貧困」という言葉に置き換えますと現代でも通用する物語であります。

### Ⅲ 第二次世界大戦後の日本と貧乏問題

戦前の日本では明らかに「貧乏物語」があてはまる状況でした。1929年 昭和4 の大恐慌の当時は農村では本当に貧乏が底をついて、娘身売りの節には村役場に相談にこられたし」という当時の写真が今でもよく引用をされますが、そのような経験が日本にはありました。

戦後の一時期も大変な貧困と飢えの時代でしたが、その時代が約10年で終わりました。1956年度の経済白書は「もはや戦後でない」という見出しをつけたことで有名になりましたが、その後高度経済成長が始まり、長く続きました。1953年 昭和28 には1929年の大恐慌を予言したソ連の有名なヴァルガ教授が「事態は1929年と同じ事態を歩んでいる。大恐慌は避け

がたい」と書き、私も「世界恐慌切迫」と書きました。

ところが昭和30年代になりますとV字型経済発展となつて当たらないことおびたしいわけであります。ヴァルガ先生につられて私も失敗いたしました。

経済学部で大学時代に卒業論文に恐慌論を書く人は多いのですが、卒業して経済学者になつてからもなお恐慌論を専門にする人は非常に少ない。私は幸か不幸か恐慌論を専攻したために随分苦しみました。戦後日本では恐慌は待てど暮らせど起こらなかったのですから。私も資本主義は1825年から10年ごとに恐慌に見舞われてきた。なぜ恐慌が起きるのでしょうか。第一章 商品生産における無政府性の問題」といって講義をしてきました。後で学生がやつてきて「先生の講義は余りにも古典的過ぎるのではないでしょうか」とかいわれて「いややそんなことはない。必ず恐慌は起きますよ」とか言い続けて19年、辛抱してきたのであります。学会でも懇親会の時など「恐慌論者がこられました」とか言われて酒の肴にされておりました。それでも1974年のオイルショックをきっかけにして本格的な恐慌が起きた時にはホッとしたのであります。

昭和30年代以後、高度成長が始まりました。とくにその最盛期となつた1961〜70年には、日本の実質

経済成長率は年平均11.1%。これはギネスブックものでしょう。高度資本主義国ではおそらくこの記録は破られることはないと思います。また労働賃金の年平均上昇率は12.2%に達し、主要資本主義国中のダントツの1位を続けました。1974〜82年石油ショックで一時ガタンと落ち込みましたが、半導体や超LSIなどのハイテク産業の確立によって危機を脱してからは、再び高い成長を続けまして、1985〜91年平均実質経済成長率は4.4%となり、再び主要資本主義7カ国中でトップを記録しました。それにつれて貧乏問題などどこかに行っちゃいました。

マイホーム、マイカーが普及し、子どもの進学率も目ざましく上昇しました。高校にはほぼ全員が進学し、大学進学率も3割を超えるところに暮しが豊かになっていきました。年々の春闘・賃上げによって労働者の生活水準は上昇して、「億総中流階級」というような意識が広まり、もはや貧乏などという問題はよほど運の悪いごく少数者の問題にすぎなくなつたと考える人々が大量に増えました。こういう時代が1990年代のバブル崩壊まで続いたわけでありまう。

戦後からこの時期までに、1959年には「新国民健康保険法」が施行され、「国民年金法」も公布されて国民

皆保険・皆年金の体制ができ、1963年には「老人福祉法」、中小企業基本法」などが制定されて、経済民主主義が行きわたつてきました。これらは「新憲法」「労働基準法」（1947年）に代表される戦後民主改革の成果が実つたものでした。これで日本は非常に豊かになりイギリスの新聞が「日本ではもはや『貧乏』と言う言葉は使われなくなつた」と書きました。

#### Ⅳ 格差・貧困社会への転落 生活問題の重大化

（1）バブル崩壊・長期停滞期 1991〜2003年

ところが、世界トップの高速成長を実現した日本経済の中からバブルが発生しました。实体经济をはるかに上回つて株価と地価が上昇する現象がバブルですが、私の家の前の道路の地価は坪200万円だったのが850万円にまでなりました。私の知人が850万円の時に売つて、その1月後には暴落して100万円を割るまでに下がりました。その友人は「危なかつた」といいながら毎年のようにヨーロッパ旅行をしております。そういうわけでバブルが崩壊し、株価と地価が暴落しましたが、なぜバブルが崩壊したかは今日は省略いたします。

## (2) 小泉内閣の構造改革 強奪の資本主義

バブル崩壊の後、1990年代の失われた10年」これは伊東光晴氏がいい出した言葉(たそうですが)に間違った政策を政府も財界もとりました。財界はもっぱら目先の利潤を得るために「乾いたタオルをなお絞る」というくらいリストラを進めました。さらに海外進出につとめました。その結果、日本経済は空洞化して国内の中小企業への注文が激減し、労働者は仕事がなくなくなります。そうなりますと購買力が大幅に低下します。GDPの60%を占める民間最終消費が低下した結果いつまでも不況からの回復ができない状態が続きました。一番の問題は、財界が購買力を高めることをしないで内部留保ばかり溜め込むという誤った政策をとったことであります。

それでは政府は何をやったか、まず金利を0にすると、企業の減税を進めることでした。その上に橋本内閣は消費税を5%に引き上げた。これで一挙に消費が大きく落ち込んでしまいました。後を継いだ小渕内閣は膨大な予算を組んで公共事業をどんどんやっています。例えば富山湾に巨大な港湾施設を建設しましたが今では市民の格好の魚釣り場になっています。所得減税・企業減税もやりました。これで購買力を回復して景気回復しよ

うとしたのでありますが、結局公共事業で財政赤字が累積することになっただけでした。小渕内閣のもとで所得税減税以外は購買力を系統的に引き上げる政策は何もなかった。消費税を上げて、公共事業をやっても、企業減税をやっても、金利を0にしてもどんなことをやってもうまくいかないということになりました。これが小泉内閣が登場する前提でした。

小泉内閣は何をやったか。私は公共事業で需要をつくりだすような事はやりません。財政赤字を増やすだけだ。今大事なことは企業を励まして、企業活力を高め投資を増やすことだ。これでこそ景気が回復する。自民党の中で私の意見に反対する抵抗勢力が増えてくれば自民党をぶっ壊す」といって「構造改革」をすすめたわけがあります。しかし最初は自民党の幹事長でさえ「実のところ私にも構造改革というのは何をするのかよくわからない」という始末でした。

「改革、改革」といいながら、簡単にいえば、企業に対しては思い切った減税、賃金の引き下げ、株式取引の減税など、とにかく企業活力を高めるためには、勝ち組みの大企業を優遇し、利潤機会を高める。そのために郵政民営化して利潤獲得のチャンスの増大、刺激を与え企業活力を高めることが「改革」だというわけです。

その前提として、アメリカの要求で銀行の不良債権の強制処理を進めましたが、銀行が貸しはがしをやるのと優良企業でも倒産します。そうすると安くこうした企業の買占めができるということでアメリカのハゲタカ・ファンドがブッシュ大統領をブッシュするわけです。この時の金融大臣は、不良債権の取立てを一気にやったら景気は回復するどころか大変なことになる。担保を競売にかけてでも不良債権を取り立てることをやると不況が広がり、新たな不良債権が発生するだけではないか、「こっさ」と反対したのですが、この大臣の首を切って竹中平蔵氏に兼任させました。

その時に新聞もシンクタンクも、強制的な貸しはがしを大々的にやったら日本経済はひどいダメージを受ける」と書きましたが、竹中平蔵氏は「私たちが不良債権処理を強力に進めたから景気が回復したんです」という意味のことをヌケヌケと言っていますが間違いです。日本の不良債権がなくなっただけは、中国貿易が急速に拡大し大量の日本製品が買付けられて景気が好転してきたことが要因です。中国貿易の急激な拡大といういわばイレギュラーバウンドで景気が活況をむかえたわけです。

小泉内閣が赤字財政下で企業の活力を高めるために何をやったか。公共事業をやめる、企業減税は続けたま

ま所得減税の方だけやめる、社会保障を切り下げる、派遣は全面的に自由化して雇用破壊を進める。正規労働者に置き換えて派遣やパートの非正規労働者が全労働者の1/3を超えるようになりました。非正規労働者は無権利、超低賃金、不安定就労、有期雇用でその結果、ワーキングプアが急増しました。石川啄木ではありませんが働けど働けど、なお我が暮し楽にならざり」で、じつと手を見る暇もなし、という状態です。

### （3）格差・貧困の著しい増大

最近OECDが、日本の貧困層の8割がワーキングプアというのは異例のことだ。何とかすべきだ」と警告を発しています。ひどい労働条件と超低賃金状態が広がって、また正規労働者も成果主義賃金とかサービス残業だとかで賃金が下がってきています。一人あたりの労働者の収入は1995年を100としますと2005年には90.7%、1割近く下がっています。一番ダメージを受けたのは年収200万円以下の層で、生活保護基準以下の層が大幅に増加しています。反対に1000万円〜2000万円の層が微増、300万円〜900万円の層がぐっと減って下へ下へとシフトしているわけです。このようにまさに貧乏がふえていく過程で大企業の利益

が大幅に増えています。

最近の「週刊現代」が、なんと竹中平蔵氏が大手派遣会社パソナの会長に就任したと報道しています。派遣労働者の賃金をピンハネして儲けている大手派遣会社の会長に就任して年間1億円近い会長報酬を手にするというのは、何たる破廉恥・厚顔、世も末であります。私はこういうやり方を「強奪資本主義」と名づけましたが16〜18世紀の資本主義原始時代のようなことになっているわけです。

#### （4）社会保障・福祉の連続的切下げ

もう一つの柱が社会保障・社会福祉の連続的切り下げです。小泉内閣は2002年度から10年間、こうした予算を毎年新たに2200億円カットしていくわけですが、初年度は3000億円カットいたしました。2009年度の今年は日本医師会が「いくらなんでもこれはひどい」と抵抗しまして230億円のカットにとどめました。これを全部合計いたしますと1兆8630億円のカットになりますが、これは新たにカットした分だけですから、カット全体を累積いたしますと2002年度から2009年度までで8兆3630億円になります。

そういうことで全面的な改悪を進めたわけですが、な

かでもえげつないのは後期高齢者医療です。所得が少なくて病気がちの高齢者だけ集めての医療保険を組むので、すから、三年に一度ずつどんどん保険料を引き上げ、治療費を引き下げましょうということで、年寄りにはよ死ね」といわんばかりの制度です。障害者自立支援法も障害者から1割の利用料を取り立てるという改悪です。

その対極において大企業減税と証券優遇税制は続けられています。法人税の税率は1984年が40%、89年が37.5%、98年が34.5%、99年には30%にまで切り下げられています。これにきましては東大の神野直彦教授が税制問題調査会で報告していますが、神野教授によりますと、租税特別措置で減税しているのを抜いて計算しているため非常に高いように現れるわけです。租税特別措置での減税分を計算に入れて、マクロの利潤と比較すると日本の法人税はイギリスについて安い。

資本金10億円以上の大企業の内部留保も著しく増大しており、2002年に173.9兆円であったのが2007年に239.8兆円となっています。法人企業統計。従業員の給料は9.7%ダウン、中小企業の役員の一人あたりの報酬は1995年度を100として2005年度は85.9に、14.1%もマイナスになっています。

す。このように中小企業は非常に苦しい状況に追い込まれています。

#### (5) 世界恐慌のもとでの格差・貧困の激化

日本はサブプライムローン証券の破綻による金融機関の被害が少なかつたわけです。アメリカやヨーロッパの十八の大銀行はいずれも数兆円という大きな被害を受けましたが、日本では「みずほ」が6300億円の損害が最大であとはそれほど大きくない。これが円高の要因になっているわけです。にもかかわらず、なぜ恐慌の影響は欧米を上回って強烈なのか。日本は恐慌の声を聞く」と巨大企業はいち早く派遣労働者の切捨てをやった。もう1つは長年バブル崩壊以後、財界と政府が国内購買力向上を犠牲にして企業の儲け優先の政策を追求し、国民の消費購買力を減退するにまかせ、対外輸出の増大を追求してきた。このような戦略が破綻し、アメリカの輸入激減・対日49%マイナスで大打撃を受けたわけです。2009年後半に入って生産がある程度回復・上昇しているのに雇用は増えず、失業が激増しています。9月失業率5.8%）

最近OECDが世界の貧困率を発表していますが、所得順に並べて真ん中の所得層の半分以下の所得しか

ない人たちの割合」で示される貧困率が、日本は14.9%で、メキシコ、トルコ、アメリカについて世界第4位です。なかでも働いている一人親世帯の貧困率は58%で突出しています。もう一つの指標はこの9月の日銀の調査で、十年前と比較して収入が減った」というのが60.9%、ゆとりがなくなつた」というのが61.5%、厚生労働省の報告で生活保護世帯は8年連続増加して2008年度は114万8788世帯となつています。まさに惨憺たる状況であります。

#### 展望 貧困問題解決のための3つの財源問題

ではどのようにすればいいのか。先の総選挙では自民・公明の両党が大敗北いたしました。勝利した民主党は当分の間はマニフェストに書いた「善政」をやるでしょうが、いずれ財源をどうするかということでは四苦八苦することは明らかで、そのときになつて「消費税を上げる」ということでは困るわけであります。今年1月26日の日経新聞では「消費税引き上げに反対」が67%、消費税引き上げはやむをえない」が24%であります。2009年度までの消費税の総額が213兆円、法人税減税は182兆円になっています。いずれ消費税増税反

対運動が国民の中で大きくなっていくことは明らかです。その時になって民主党には決断をしてもらわなければなりません。それは2つありまして、まずは大企業の巨大な内部留保を取り崩して社会に還元することと企業減税をやめて元に戻すことです。大企業の内部留保は2007年度で239兆円もあります。会計学者は40%は現金化可能と計算しています。40%で96兆円です。そのすべてを取り崩すことはできませんが、遠慮してその10%で計算すると9兆6千億円の財源が出てきます。さらに軍事費の削減ですが、アメリカへの思いやり予算」2000億円、グアム基地建設に3兆円などともないことです。

内部留保の問題では今年の1月共産党議員が質問した際に、麻生首相も 私も企業にお考えいただきたいと思えます」といっています。しかし言うて見ただけでは困るのであります。国民が意識を高めて民主党にこうした声を実現してもらわなければなりません。以上で河上先生が「貧乏物語」の中に残された精神が何であったのかという話を終わります。



# 河上肇と現代の社会主義

長砂 實

河上肇記念会世話人、関西大学名誉教授

## ○河上肇記念会からの二挨拶

本日はこのように沢山の方がお集まりいただきました。まことに有難うございます。いま司会の山本さんが申しましたように、冒頭に河上肇記念会からの二挨拶をさせていただきます。実は本日、代表世話人である京大名誉教授中野「新先生の都合が悪く、私が代役を務める次第です。



河上肇記念会についてご紹介いたします。河上肇記念会は現在京都を中心に活動しています。が、実は東京にも、また河上先生の出身地である山口県の岩国にも、河上記念会がありました。

しかし、現在は、東京河上会は会員の高齢化が進み、また、岩国の河上記念会は数年前、京都の河上肇記念会に統合されました。この河上肇記念会と大阪との関連ですが、また、なぜ今日のように大阪で記念講演会なのかということにかかわるのですが、実は、河上肇記念会の実際の活動は1950年代から大阪の菅原弁護士などが熱心にやられていた、という歴史があります。しかし、正式に河上肇記念会が発足したのは1973年、京都においてです。現在四〇〇人ばかりの会員ですが高齢化が進んでいます。これはやむを得ません。この記念会の性格ですが、会則は次のように定めています。

「この会は河上肇先生の人格とその業績を称え、これを広くかつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。」  
「この会は河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人々を会員とし、資格や政治的立場を問わない。」  
「本日お集まりの皆様のなかで会員になっておられない方はどうかご入会ください。歓迎します。記念会は二十人ばかりの世話人会で運営しております。歴代の代表世話人は大変著名な方です。初代が末川博先生、ついで住谷悦治先生、そして、杉原四郎、木原正雄、「海知義の諸先生と続き、現在は中野「新先生です。記念会が実際になにをやっているかと申しますと、このような講演

会を年に一、二度必ず開催しています。毎年10月に、河上先生のお墓がある京都東山の法然院で先生の法要を営み、総会を開催し、時代に即したテーマでの講演を聴くことにしています。今年に關しましては、10月18日に、今日もお見えの著名な関西大学教授・森岡孝二先生を招いてお話をうかがいます。河上先生のお墓は、法然院の門を出たところにあります。そこには立派な墓碑も立っております。どうか皆さんも、機会がありましたらお参りください。

さて、今日の講演会は河上肇生誕 三三〇周年を記念してのものであります。一〇〇周年と一一〇周年は京都で開催しましたが、先に述べました大阪との因縁もあり、二二〇周年は大阪で開催しました。10年ぶりです。どのようなテーマにしようかと考えました。世話人会で相談した結果、やはり「河上肇と現代の『貧乏物語』」が、格差・貧困が最大の問題となっている今日もとても相応しいテーマであり、その点では、最近出版された河上肇の『貧乏物語』と『第二貧乏物語』の解説を書いておられる林直道先生が最適の講師である、と決まりました。ご快諾いただきました林先生に感謝申し上げます。もう一つのテーマ「河上肇と現代の社会主義」は、たまたま私が『ム連社会主義』の研究者であること、ム連社会主

義」は崩壊したけれども現代資本主義も危機的状況にあつて「社会主義」問題の再評価を時代が要請していること、そして河上肇先生にとつても「社会主義」が最大の関心事の一つであつたこと、から決まりました。私が、林先生の講演の前座を務めることになった次第です。

## I 河上肇と社会主義

さて、本論に入ります。お手許に、2ページの講演レジュメ、河上肇の略歴・主要著作・時代背景、そして河上肇『習言』集」をお配りしています。それらに沿つてお話する予定ですが、ちよつと欲張つたプランです。

河上肇の「社会主義」思想はかなり独創的ですが、同時に大きく変化・発展しています。詳しくは後にしますが、時代的背景をおさえておく必要があります。河上は日本の明治・大正・昭和時代を生き、資本主義の急激な勃興、新興帝国主義国としての発展、天皇制という「国体」の確立、国内諸矛盾の激発、強力な弾圧体制、軍国主義の支配、対外侵略戦争の継続と太平洋戦争での敗戦などを直接に体験しました。河上肇の「社会主義」思想には、このような日本という土壌の特性が強く反映しています。他方、当時の世界は帝国主義と呼ばれる発展段階に入り、第一次世界大戦、ロシア十月社会主義革命、

そして第二次世界大戦を経験しました。新興「社会主義」国ソ連から伝わってくる情報と社会主義理論は、当然のことながら、河上肇の「社会主義」思想に大きな影響を与えました。いわゆる「マルクス・レーニン主義」の積極的受容です。河上の「社会主義」思想は国際的色彩を帯びて行きました。

また、河上肇にとつては、「社会主義」は「思想・理論」であるに止まらず、自ら参加する「運動」でもありました。さらにまた、河上肇にとって、「社会主義」はソ連で建設中であつた「体制」の問題でもあつたのです。

このような時代を背景にして、河上肇は、「経済学者」としては「個人主義の経済学」者から「社会主義の経済学」者（マルクス経済学者）へと転身し、「社会主義者」としては人道的「空想的」社会主義者から科学的社会主義者（社会主義者）へと転進し、政治家としては日本共産党の同調者・協力者から共産黨員へと前進し、一定の挫折・逮捕・転向（除名）を経て戦列に「復帰」する、という波乱万丈の一生を送つたのです。これらのことを、やや詳しく、河上肇の人生の諸段階ごとに見てみましょう。

(一) 河上肇は1879年（明治12年）に山口県岩国で

生まれ、山口高校を経て、1902年に東京大学の法科を卒業しています。

この時期、日本で注目すべき出来事は「大日本帝国憲法」発布（1889年）と日清戦争（1894～1895年）の他、片山潜・幸徳秋水・安部磯雄・村井知至・木下尚江による「社会主義研究会」の発足（1898年）、片山らによる「社会民主党」の結成（1901年、即禁止）でしょう。日本でも既に「社会主義」の思想と運動が展開されていたのです。第二インターナショナルの創立は1889年。また、極めて興味ある事実、マルクスとエンゲルスは当時未だ活動していたこと（1883年と1895年に死去、および、レーニンにしても河上肇とは9歳だけ年長（1870年生まれ）であつたし、スターリンは河上肇とぴつたり同年齢（1879年生れ）ということです。河上肇はそのような「時代の子」として育っています。

(二) 河上肇は1903年から教職につきますが、千山萬水楼主の名で「社会主義評論」を読売新聞に連載（1905年）して注目されました。無我苑」で宗教的体験をしました。「日本農政学」（1906年）という大著を著しています。

この時期、日本での最大の事件は日韓議定書の調印

1904年）と日露戦争（1904～1905年）でしょう。日本のアジア大陸侵略の端緒です。この戦争の前後に、日本の社会主義運動は大きな盛り上がりを見せました。幸徳秋水『社会主義真髓』、片山潜『我社会主義』の発行や『平民新聞』の発行があり（1903年）、日本社会党、日本社会平民党・社会主義同志会・平民協会などが相次いで結成され、即禁止されました（1906～1907年）。『社会主義研究』の創刊（1906年）、片山潜の『社会新聞』の創刊（1907年）もありました。時代の流れに敏感であった河上肇の『社会主義評論』が「時代の潮流に乗るものであったことがよく判ります。なお、ロシア社会民主労働党第二回大会でレーニンが率いるボリシェビキがメンシェビキと決裂したのは1903年のことです。ロシアでは日露戦争敗北を機に革命運動が高揚します。

㉔ 河上肇は1908年に京都大学の講師となり、1915年に教授になりましたが、1928年に辞職します。この20年間で、河上肇が経済学者としてもっと多くの業績を残した時期であります。この時期の著作には枚挙の暇がありません。二つだけ挙げますと、『貧乏物語』（1916年に大阪朝日に連載、1917年に出版）と『資本主義経済学』の史的発展』（1923年）です。『貧乏物語』は今でも読

まれている名著の一つです。鋭い社会時評ではあったのですが、人道主義の立場で貧乏を克服しようと論ずる弱さを持っていました。これについては林先生が触れられるでしょう。河上は後にこれを絶版にしました。『資本主義経済学』の史的発展』は河上肇が、利己主義と利他主義との関係」を論じた自信作でした。しかし、これは、河上の弟子ではあったが先んじてマルクス主義に通曉していた榎田民蔵から鋭く批判され（社会主義は闇に面するか光に面するか）1924年）、また福本和夫からも批判されます。他方、河上は、当時の学生たちの理論的リーダーでしたが、治安維持法適用第二号となった「学連事件」が起き、その責任を問われます。また、河上の日頃の左翼的な言動は、政府・権力の逆鱗に触れていました。当時の京大総長は政府の圧力に屈し、京大経済学部も河上の辞職を促しました。河上は「教授会の自治を尊重」して不本意ながら京大教授を辞しました。これは、京大経済学部教授会の大きな汚点です。このことを含む「戦争責任」を反省して、敗戦直後、京大経済学部教授会は総辞職することになります。）

この時期、日本は韓国を合併し（1909～10年）、第一次世界大戦（1914～1918年）に参加し、ロシア十月社会

主義革命 1917年)には長期のシベリア出兵(干渉)で対応しました。国内弾圧体制も強化され、大逆事件」で幸徳秋水らが死刑に処され 1910~1911年) ました。ロシア革命のあとコミンテルンが結成され 1919年)、世界諸国に共産党が設立されました。日本共産党が創立されたのは1922年です。共産党以外に、各種の合法社会主義政党」日本農民党、社会民衆党、日本労働党、労働農民党など)が結成され 1926年)、いわゆる「労働派」の旗上げもありました『労働』発刊 1927年)。米騒動 1918年)、関東大震災 1923年)もこの時期です。日本の天皇制権力は、治安維持法を制定 1925年)して「国体」護持に狂奔します。

ロシア10月社会主義革命が河上肇をマルクス経済学者、共産主義者へと前進させた巨大なインパクトであった事は間違いないと思います。河上はレーニンの著作からも多くのものを学び、ロシア十月社会主義革命を歓迎し、コミンテルンの活動に注目します。

④ 河上肇は、京大教授を辞した後、自分のマルクス主義経済学の仕上げに専念します。それは『資本論入門』 1928年)、『経済学大綱』 1928年)、第二貧乏物語』 1929年、改造』に連載)、『マルクス経済学の基礎

理論』 1929年)などの著作として結実します。他方、政治活動にも身を投じ、新労働党結成に参加したりします 1929~1930年)。この時期は河上がマルクス主義経済学を大成させた段階と言えます。また、科学的社会主義者(共産主義者)として自己を「完成」させる寸前でした。

この時期、日本では政治的反動が一層強まりました。治安維持法が改悪され 1928年)、最初の普選で当選した労働党の代議士、山本宣治が刺殺されました 1929年)。しかし、大山郁夫らの労働者農民党、新労働党結成(即禁止)や、小林多喜二『蟹工船』出版(1929年)、野呂栄太郎『日本資本主義発達史』発刊(1930年)など、弾圧に屈しない闘いは続いていました。ソ連では第二次5カ年計画 1928年)と農業集団化が始まりました。他方、資本主義世界は大恐慌に見舞われます 1929年)。帝国主義日本は柳条湖事件(満州事件)を惹き起こす 1931年)、本格的に对中国侵略戦争を開始します。

⑤ 河上肇は1932年に日本共産党に入党し、直ちに地下にもぐりました。しかし直ぐ検挙され 1933年1月)、長期の獄中生活を余儀なくされます。そして、政治的「実活動」と絶縁するという趣旨の「獄中独語」を

発したために共産党から除名されました。懲役3年9ヵ月判決は5年、恩赦あり）の実刑を言へ渡され、1937年6月に刑期満了で出獄しました。獄中で河上は、漢詩を学ぶ一方、注目すべき論考、宗教的真理について「

1935年）、獄中贅語」1937年）を書いています。

河上は入党を許された「喜び」を、たどりつきふりかえりみればやまかわを「ええはええてきつるものかな」と謳いました。この句は法然院のお墓の歌碑に刻まれています。マルクス学者としての私は今やっとマルクス主義者として自己を完成することが出来た……私のこの「首の歌には54年に互るいのちが集約されている……」と、後に「自叙伝」に記しています。当時の社会情勢を考えると、河上の入党決意は稀有のことであった、と言わざるを得ません。しかし、『獄中独語』の執筆・公表は確かに「一種の転向」でした。ただし、当時「流行」した一部の共産党幹部達（佐野・鍋山ら）の文字通りの変節・転向とは異なるものでした。獄中独語」のなかで、共産主義者としての自分を自分自身の手で葬るわけ」だが「私は依然としてマルクス主義を信奉する学者の一人としてとどまる」と書きました。後にまた、河上は、たとい「時は日本共産党が壊滅し、コミンテルンが崩壊するようなことがあっても、そんな事柄は彼の学問的

信念に対し微動だも惹き起こすべき筋合いのものではない」（『自叙伝』）と書きました。しかし、日本共産党が河上を除名したのは当然でしたし、河上もそれを甘受しました。獄中での河上の動揺を河上秀夫人が押し止めたことは有名な話です。

この時期、日本は中国侵略を本格化し（満州国「建国」が1932年、国際連盟を脱退します1933年）。国内では政治的弾圧が荒れ狂います。岩田義道虐殺（1932年）に続いて、大塚金之助・河上肇検挙、小林多喜二虐殺、京大瀧川事件、宮本顕治検挙があり（1933年）、美濃部達吉「天皇機関説」が攻撃されました（1935年）。

2. 26事件が起き、日独防共協定が結ばれたのは1936年です。ドイツではヒトラーが首相になりナチス「党独裁が始まりました（1933年）。他方、ソ連では「社会主義」の勝利を宣言した「スターリン憲法」採択（1936年）にも拘らず、キエフ暗殺（1934年）を契機に大量粛清の時代に入ります。資本主義世界では世界恐慌からの本格的脱出はなりませんでした。第二次世界大戦の暗雲が垂れ込めてきていたのです。

⑥ 河上肇は、1937年6月に出獄しました。出獄に際して河上は、河上肇万歳！マルクス主義万歳！」と書き

記しました（『獄中日記』1937.6.14）。1941年に京都に移住し、経済学研究の再開は断念したまま『實叙伝』執筆に力を入れました。漢詩の研究も続けました。そして敗戦を迎えます（1945年8月）。河上は、敗戦を知って「おなうれしともかくにも生きのびて 戦やめるけふの日にあう」と詠みました。1945年秋に出獄した日本共産党の幹部達は河上の党復帰を要請し、河上は涙ながらにそれを受け入れました。この事情について、近年、私は『雲報』No.86に一文を載せています。）意気は軒昂でした。われもし十年若かりせば／菲才われもまた／筆を提げ身を挺して／同志諸君の驥尾に附し／澎湃たる人民革命の／滔天の波を攀じて／共に風雪を叱咤せん」と詠みました（『同志野坂を迎え』1946.1.17）。しかし、身体は栄養失調で衰弱していました。1946年1月30日、河上肇は死去しました。享年68歳。河上の最晩年の仕事は、『自叙伝』1947年、『陸放翁鑑賞』1949年、『獄中日記』1949年）として出版されました。なお、『河上肇全集』1982～1986年）があります。

この時期、日本は盧溝橋事件（1937年）で日中戦争を拡大、真珠湾攻撃（1941年）で太平洋戦争に突入しました。そして、沖繩戦、広島・長崎への原爆投下、ソ連参戦などの悲惨な被害を経て連合国に無条件降伏しました

1945年）。西洋で第二次世界大戦（1939年～）を始めたのはナチス・ドイツ（ヒトラー）でしたが、日本は、東洋でそれよりも早く戦争を始め、ドイツ敗北後もなお第二次世界大戦を継続したのです。昭和天皇の重い戦争責任を思わざるをえません。治安維持法が廃止されたのは1945年10月15日です。河上肇が注目していた社会主義／ソ連について言えば、この間、フィンランドと「冬戦争」をやり（1938年）、秘密議定書を伴った独ソ不可侵条約を締結して（1939年）ドイツとポーランドを分割占領しました。しかし、結局は独ソ戦（大祖国戦争）を余儀なくされ、莫大な損害を蒙りながら、第二次世界大戦に勝利しました。スターリンは、対日参戦で日露戦争の恨みを晴らした」と語ったものです。ソ連の勝利と不可分に、東欧とアジアで、社会主義を目指す「連の国が誕生しました。植民地だった国々が次々に独立しました。米ソの冷戦」が始まり、世界は資本主義と社会主義との「二つの世界体制の共存の時代」となったかに見えました。

しかし、1980年代後半の「東欧革命」の進展とベルリンの壁」の崩壊は、遂に「社会主義」ソ連の崩壊にまで行き着きました。河上肇が夢想もしなかった事態が出現したのです。

このように、河上肇にとつて「社会主義」は、研鑽の末に獲得した揺ぎない「思想・理論」であるとともに、自ら身を投じた「運動」であり、さらに、輝かしい未来を約束したかに見えた「体制」でもあったのです。

## Ⅱ 20世紀社会主義」とは何であつたか

### その生成、崩壊、部 残存」

19世紀後半にマルクス・エンゲルスによつて創始された科学的社会主義の「理論」は、20世紀にレーニンによつて發展させられ、「運動」としては第一次世界大戦末期の1917年にロシア10月社会主義革命をもたらし、ロシアで体制としての「社会主義」の建設が目指されました。

そして、ソ連では1930年代の後半に「共産主義社会の第一段階」としての「社会主義の完全な勝利」が宣言されました。また、第二次世界大戦でのソ連の勝利およびソ連による解放・占領と不可分に、ヨーロッパとアジアで「社会主義を目指す」国々が誕生しました。大民主主義革命、新民主主義革命」。1960年代初頭にはソ連における「社会主義の完全かつ最終的な勝利」と「社会主義世界体制」の成立が謳われました。しかし、まさにその時点から、この「体制としての社会主義」の変調が目

立ち始めました。中ソ対立に代表される「社会主義陣営」の内部対立が激しくなり、各国の経済成長・発展にも陰りが生じました。「資本主義世界」との「平和的共存・競争」を通じての「社会主義世界」の勝利、という展望は夢物語りになりました。1980年代後半から「東欧革命」が進展し、「社会主義世界」の本家本元であつたソ連も1991年に崩壊・解体しました。「社会主義を目指す国」として「残存」しているのは、中国、ベトナム、キューバだけになりました。

したがって、「20世紀社会主義」は、本来、20世紀における社会主義の理論・運動・体制の総体において捉えるべきでしょう。しかし、ここでは、とりあえず、2世紀を通じて「現存する社会主義」と呼ばれてきた「ある体制としての社会主義」を念頭に置くことにします。その場合、「20世紀社会主義」はその大部分が崩壊した「ソ連・東欧」けれども一部分が「残存」している「中国・ベトナム・キューバ」と言えます。では、「20世紀社会主義」とは何であつたのでしょうか。その生成経路、基本的諸特徴、そして崩壊原因を見てみましょう。

1. 生成の特殊経路 「20世紀社会主義」は極めて特殊的な歴史的諸条件のもとで生成しました。

第二に、それは二度の世界大戦の「落とし児」です。ロシア10月社会主義革命は第一次世界大戦からの革命的脱出でした。戦争を継続する政府を倒して革命政権が講和を達成したのです。それは武力・暴力革命とならざるを得ませんでした。また、殆ど必然的に内戦と外国干渉との戦いを余儀なくされました。革命政権とその体制が強度に軍事的性格を持つ事は避けられませんでした。東欧諸国における人民民主主義革命も、第二次世界大戦でのソ連による解放と占領という条件抜きにはありえませんでした。そこにはソ連的「社会主義体制」が「輸出」されました。中国、ベトナム、キューバの革命も、内戦での勝利でした。ソ連の経験と援助が重要な役割を果たしました。

第二に、それは、帝国主義的發展段階に入った20世紀資本主義世界の後進・周辺地域で生成しました。帝政ロシアは強度に後進的な帝国主義国でした。既に戦間的な労働者階級が形成されていたとはいえ、国民の圧倒的部分は農民でした。帝政が打倒されたのはようやく1917年の2月革命においてでした。そこから「一挙に同じ年の10月社会主義革命に「飛躍」したのです。革命政権は、社会主義革命を標榜しながらも、後進性の克服を目指してブルジョア民主主義革命「社会」の諸課題にも取り

組まざるを得ませんでした。土地国有化という形での農民的要求の充足、農民と労働者の階級同盟への腐心とその動揺、当面の生活向上を犠牲にした社会主義的工業化の強行、などがその典型例です。経済面で、資本主義に追いつき追い越す「事が最重要課題として設定されました。また、帝政時代の官僚制「専制的体制」は、革命政党にも革命政権にも根強く再生されました。市民社会の成熟度は低く、政治・社会のすべての面で民主主義は未発達でした。したがって、社会主義革命に本来的な社会主義的諸目標・価値の実現はその優先度が低められ、等閑視されました。また、後述のように、社会主義的目標の「極左的」追求も生じました。要するに、後進的遺産が大きく、またその克服という当面の課題があまりにも巨大であったために、本来的な社会主義建設の諸課題には十分に力が入らなかった、と言えるでしょう。

ソ連によるナチス・ドイツからの解放と占領によって人民民主主義革命「後に社会主義革命に転化した」と言われる①を開始した東欧諸国「東ドイツ、ポーランド、チェコスロバキア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、ユーゴスラビア」も、西欧諸国に比べて、もともと強い経済「社会的後進性」を特徴としていました。そこへソ連による「支配」という要素が加わり独自の「自主的

発展が阻害されました。ユーゴスラビアとて例外ではありませんでした。アジアでの中国やベトナム、さらにキューバでは、殆ど資本主義以前の発展段階から出発することになったことは周知です。これらの国では、ロシアと同じ、あるいはそれ以上に社会主義建設は困難であったのです。

第三に、それは、世界的規模から見れば局地的・孤立的存在でした。終始「資本主義世界」に包囲されてきました。ロシア10月社会主義革命の成功のあとレーニンのボルシエビキたちが期待した「世界革命」・ヨーロッパ革命への伝播は不発に終わりました。そもそも、世界各国で「共産党」が創立されたのは十月革命以後です。創設されたコミンテルンも十分に機能しませんでした。

ソ連は強固な「資本主義的包囲網」のなかでの困難な「社会主義建設」を余儀なくされたのです。この情勢は当時のソ連の最高指導者であったスターリンが内外政策で犯した誤りの客観的基礎となります。ネップの早期停止、社会主義的工業化や農業集団化の強行などの「極左的」路線の選択、社会主義の前進は社会主義の敵対者を生み出す」という「理屈」での政治的大量弾圧・肅清（天民の敵）には、必ず外国帝国主義のスパイの汚名が着せられました。の国内抑圧体制の確立、対外政策での露骨

な「国益主義」・「ロシア・ソ連大国主義」、対ドイツ・ナチズムへの対応が失敗、独ソ不可侵条約と秘密議定書の調印、フィンランドとの「冬戦争」など、した拳句の独ソ戦突入、その初期段階での大敗北などが、スターリンの誤りの最たるものです。独ソ戦、第二次世界大戦でのソ連の勝利は、これらの誤りを免罪するものでありません。これらの誤りは、東欧やアジアの「連の国が「共産圏」を形成するようになった戦後も継続されました。これらの国に「ホスターリン」が現れました。1956年以降のスターリン批判にも拘らず、「改革」によってこれらの誤りが清算されたわけではありません。国内では「一党支配の専制、対外的にはソ連大国主義・覇権主義が、米ソ冷戦」下で堅持されました。社会主義世界体制」全体に、局地性と孤立性とは顕著でした。社会主義世界」の国々は当時の中国も、資本主義世界との背伸びした「経済競争」に勝利する展望を持たず、「ブルジョア思想」の影響を遮断するための思想統制・「一党支配の国内体制をひたすら強化し、同時に、侵略に備えるための軍拡競争に狂奔することになりました。社会主義世界体制」は資本主義世界体制」に戦闘的に挑戦するかに見えて、実は、自らの「橋頭堡」の防衛に必死だったのです。本来の社会主義的諸目的・価値の実現を追求する余裕は極めて限

られていました。資本主義世界」とりわけそのリーダーであるアメリカはこの「窮状」を見逃しませんでした。その不團結と不首尾につけこんで、陰に陽に 各個撃破政策」が取られ、それが成功していくのです。

第四に、しかし、それが果たした人類史的貢献を正しく評価すべきでしょう。ロシアの10月社会主義革命は、紛れもなく世界で最初の本格的な社会主義革命でした。それは敗北しましたが、人類の新時代を画したことは間違ひありません。今でも「社会主義の火」は燈り続けています。ソ連が自ら大損害を受けながら第二次世界大戦に勝利したことも肯定的に評価すべきです。また、ロシア革命の開始と第二次世界大戦の結果とが、古典的帝国主義に固有だった植民地体制の全面的崩壊を導いた重大な要因であったことも指摘しなければなりません。ソ連および「社会主義世界体制」が首尾一貫した「世界平和の擁護者」であつたかどうかについては、問題なしとしません。ソ連は、1930年代末にフィンランドと冬の戦争」をやり、バルト三国を軍事的に占領し、ポーランドを分割占領しました。第二次世界大戦終了直前の対日参戦にも領土拡張の野心があつたことは見逃せない事実です。第二次世界大戦後、「連の東欧諸国へのソ連の軍事介入・侵略、アフガニスタン侵略もありました。冷戦」

では核兵器開発・増強の最大当事者の一角となつて、核戦争の危機を醸成させた責任も免れられません。中国とベトナムの戦争もありました。ソ連と「社会主義世界」の国々が模範的な「世界平和擁護者」ではなかった、ということとは確かです。

2. 基本的諸特徴 崩壊要因 現存する わたし 社会主義」については総合的な評価が必要です。

① 思想・イデオロギーの面では、教条化されたマルクス・レーニン主義」が「国家哲学」とされました。特定の最高の政治的指導者（スターリンや毛沢東）の言説が金科玉条とされ、あらゆる異論が排斥されました。

このような体制は、「言論の自由化」とともに、「一挙に崩壊することになります。

② 政治の面では、「一党独裁体制が特徴的でした。複数政党制が存在する場合もそれは名目的なものでした。支配政党の党内民主主義は極めて弱く、最高指導者の個人独裁に陥りがちでした。党と国家の機構が癒着し、官僚主義がはびこりました。党・国家の権威主義がまかり通り、地方・集団・企業レベルでの自治は逼塞し、民衆・個人の自主的・能動的な政治参加は極めて限定され

ていました。要するに、政治の分野での「社会主義的民主主義」の発揚は掛け声に終わり、勤労者・国民は政治的主人公にはほど遠い状態におかれました。

このような体制は、「複数政党制」と「自由選挙」の導入によって、「挙に崩壊することになります」。

③ 経済の面では、搾取の廃絶を目指して生産手段の社会的所有が国家的所有および集团的所有の形態をとり、国家・指令的「計画経済」が行われましたが、勤労者個人および企業の自主性・創意性の發揮が抑制されたために、効率的な経済運営が出来ませんでした。商品生産・市場経済の役割の軽視もそれに輪をかけました。後進的状态から脱却するために、経済的に資本主義に追いつき「追い越す」という課題を設定し、「一時的には成果もあげましたが、コンスタントに現存資本主義を上回る水準の技術・生産力・労働生産性・生活・環境を達成することは遂にできませんでした。資本主義との平和的経済競争」に敗北したのです。要するに、経済の分野でも、勤労者・国民が真の主人公となり得なかった、つまり「社会主義的生産諸関係」の確立に失敗したがため、このような結果が生じたのです。「社会主義経済」が本来有している筈の資本主義経済に対する優位性は發揮されません

でした。

このような体制は、「市場経済の全面的導入」と「民営化」「私有化」によって、「挙に崩壊することになります」。

④ 国際関係の面ではインターナショナルイズムが唱導されました。しかし、例えばソ連の場合、一方では資本主義世界・諸国と軍事的対抗を余儀なくされた「軍事干渉、侵略との闘い」とはいえ軍事大国化してアメリカと「覇」を競い、他方では、「社会主義世界体制」の内部で露骨にソ連・ロシア大国主義・覇権主義を実行しました。

「国際共産主義運動」においても、ソ連共産党は常に「親分」として振舞おうとしました。要するに、国際関係の分野で、ソ連に代表される「社会主義」国は、国際的民主主義の担い手としては大きな欠陥を抱えていたのです。このような体制の基本的部分は、「冷戦の終結」、「東欧革命」と「ソ連の解体」とともに、「挙に崩壊しました」。

### 3. 「社会主義」だったのか

20 世紀「社会主義」は果

たして「社会主義体制」といえるものだったのでしょうか。伝統的な理論「マルクスとレーニン」の科学的予見では、資本主義社会から共産主義社会への「過渡期」を終えれば、「共産主義社会の第一段階」としての「社会主義」に到達する、とされていました。そして、その具体

的適用としては、ソ連では1930年代の後半に、「連の東欧諸国では1960年代の前半に、「過渡期」の終了と社会主義社会」の到来が宣言されました。さらにソ連では、1960年代の前半に、社会主義の完全かつ最終的な勝利」が言われました。ところが、1980年代末以降、東欧諸国に続いてソ連の「社会主義体制」は崩壊し、資本主義の復活・体制転換」が生じ、現在に至っています。したがって、この事実に照らせば、「20世紀社会主義」は「社会主義を目指した」理論や運動ではあったが「過渡期」を完了することができず、社会主義体制・社会」としては結実しなかった、という結論が引き出されて当然です。また、現在の我が国では、ソ連は社会主義ではなかった」とする見解が有力に行われています。

この問題についての私の見解はやや複雑です。伝統的な理論は今でも正しい、と思っています。具体的な歴史への適用については、ソ連での通説を基本的に受け入れてきました。ソ連社会主義」の改革を期待していました。ソ連崩壊後も、既に「過渡期」を終えている「ソ連社会主義」が重大な諸欠陥を克服できなかったことにその崩壊の主因がある、と考えてきました。しかし、現実を冷静にみるならば、次のように言うべきでしょう。20世紀社会主義」の大部分「ソ連と東欧諸国」は「過渡期」

社会主義建設」の完了に失敗して資本主義復活に至った、「20世紀社会主義」の一部分「中国、ベトナム、キューバ」は、今なお「過渡期」の諸課題と格闘している、と。また、ソ連が社会主義でなかった」とする立場を一貫させるならば、「中国もまた社会主義でなかった」し、今もなお「社会主義ではない」と言わねばなりません。ダブルスタンダードは許されません。中国はまた「社会主義への過渡期」であり、社会主義が勝つか資本主義が勝つか」という「過渡期」の基本的課題は社会主義に有利に解決されている、とは言えません。極めて特殊な「過渡期」です。そもそもその「過渡期」の出発点は、古典的命題が念頭においているような「資本主義社会」ではありませんでしたし、現在の中国が「体制としての社会主義」の本来的諸特徴をどれだけ備えているか、甚だ疑問です。にもかかわらず、中国の公式見解によれば、中国は「中国の特色をもった社会主義」・「初期段階の社会主義」・「社会主義的市場経済」であり、これに対してベトナムの公式見解によれば、ベトナムは「社会主義への過渡期」・「社会主義をめざす市場経済」である、ということを指摘しておきます。

### Ⅲ 21世紀社会主義」をどのように展望するか

講演では、時間の都合でこの部分は基本的に割愛せざるをえませんでした。したがって、ここでは、当日配布した講演レジメの要点を紹介し、若干の補足をするに止めます。

#### 1. グローバル資本主義」の限界の露呈

社会主義ソ連」崩壊 1991年）などから、社会主義」に対して資本主義が最終的に勝利したという意味で、歴史の終わり」が言われるようになりました。しかし、そうでないことは直ぐに判明しました。今日の世界恐慌がそれを端的に示しています。新自由主義のグローバル資本主義を乗り越える、新しい社会主義」が待望されています。マルクスは生きている」という議論が盛んです。

#### 21世紀社会主義」については、社会民主主義 修正・

改良資本主義」の立場からか、それとも科学的社会主義（資本主義の根本的変革）の立場からか、によってその理解と展望が大きく異なります。私は後者の立場をとります。

#### 2. 21世紀社会主義」の胎動は未だ微弱

世界諸国・地域の現状を見ると、そう言わざるをえま

せん。

① 発達した資本主義諸国で、21世紀社会主義」の理論と運動は低迷しています。そのことは西欧諸国に顕著です。例外的に元氣」といわれる日本共産党も、国会で僅かの議席しか獲得できない、というのが現状です。

② 旧ソ連・東欧諸国では、資本主義への逆行」体制転換」が不可逆的に進んでいます。旧政権政党は社会民主主義政党に変質して存続するか、あるいはオーソドックスな極小 左翼政党」にとどまったままです。ロシアで議席を有する唯一の野党であるロシア連邦共産党は刷新された社会主義」を標榜していますが、スターリン主義」と愛国主義」を克服できておらず、多くを期待できません。ロシア革命」は根本的なやり直し」が必要です。

③ 20世紀社会主義の生き残り」の諸国 中国、ベトナム、キューバ）を 社会主義を目指している国々」と位置付けることは一応可能ですが、正確には『国家資本主義』が優勢な過渡期」にあると言うべきでしょう。実際にそこでは国家資本主義」ヤーニンの規定による」が発展しており、資本主義的進化の可能性」も否定でき

ません。その「体制」は期待される「21世紀社会主義」像からはほど遠いのです。

④ 中南米諸国を中心とする発展途上国で、新しい社会主義の運動が成果を挙げています。左翼の大統領及び政権が続々誕生・持続しています。注目すべき動向です。しかし、そこでの「新しい社会主義」の基本的内容は、新自由主義を批判しての格差・貧困との闘い、および国民経済の自立的発展の追求です。「新しい社会主義」を目指すとはいえ、極めて端緒的な運動なのです。「革命政党」の成長もこれからです。

3. 「21世紀社会主義」の理論・運動・体制についての展望  
しっかりと科学的な概念・展望が必要です。

マルクス主義（科学的な社会主義）を、①資本主義の根源的批判理論の普遍的妥当性の再確認、②「20世紀社会主義」の理論・運動・体制の徹底した批判的検討、③現代グローバル資本主義の科学的解明を通じての「新しい社会」の諸萌芽・前提の発見、によって創造的に発展させましょう。その上に、「21世紀社会主義」論を構築すること。「新しい社会主義」への基本的道筋とその基本的理念像の解明」です。我が国でいう「未来社会論」の課題です。

① 「過渡期」と「社会主義」についてのマルクスの古典的2命題

マルクスは「資本主義社会から共産主義社会への過渡期」と「共産主義社会の低い段階と高い段階」との二つの命題を残しました『一タ綱領批判』。レーニンはその「低い段階」を「社会主義」と呼びました『国家と革命』。この見解は長らく通説となってきました。近年、我が国では、「共産主義社会」をもっぱら「労働に応じた分配」と「必要に応じた分配」という分配原則の違いで2段階区分することに疑問が出されています。本格的な議論はなされていませんが、私の意見では、2段階区分の基本的標識は「旧社会の母斑」の有無にある、と考えています。差し当たり、「過渡期」と「社会主義」とは概念が異なることの確認が肝要です。両者の概念の混同が今までしばしばあったし、今もあります。また、「過渡期」と「社会主義」の古典的概念は抽象度が極めて高い、ということに注目する必要があります。その具体的適用にさいしては慎重であるべきです。

② 「資本主義から社会主義への過渡期」の現代的、具体的イメージの構築を試みてみましょう。

① 出発点となる「資本主義社会」は、実際には、多

様でありえます。今までに例があるように、資本主義社会以前の社会」を出発点とすることもありえます。）したがって、過渡期」の諸課題も多様でしょう。ここでは、発達した資本主義社会での「社会革命」を出発点とすることに限定して考えてみます。

② なんらかの「社会主義革命」の開始・成功が「過渡期」を切り開く必要不可欠の条件です。その「革命」は、複数政党制下の議会、あるいは大統領選挙で国民の多数意思が表明されることによって確認され、平和的形態をとるでしょう。そのためには、公正な選挙制度の確立・運用が必須条件となります。革命政党と革命統一戦線」が政権を担うでしょう。国家権力は勤労人民・広義の労働者階級」が掌握することになります。その限りで、過渡期」の「社会主義国家」が誕生します。しかし、反対諸」政党も政治活動の自由を保障されるべきで、政権交代」は当然ありうるのです。政権交代」はあっても、政治の主人公」としての国民が成長・成熟し、革命政権」がますます強くなる、というのが「過渡期」の長期的展望でしょう。したがって、過渡期」は政治的には「民主主義の発展を通じての社会主義への道」となりましよう。民主主義は「社会主義」と対立するものでなく、民主主義の発展こそが「社会主義」を準備し

近づけるのです。

③ 過渡期」の経済的諸課題はどのようなものでしょうか。資本主義社会が達成した高度な生産力はそのまま引き継がれます。社会主義的工業化」などは必要ありません。生産諸関係を資本主義から社会主義に変革していくことが主要な経済的課題となります。生産手段の資本主義的私的所有を社会的所有に変革すること（生産手段の社会化）から始まるでしょう。社会的所有には、国家的所有、自治体的所有、労働集団的所有、協同組合的所有などの諸形態が考えられます。それらに共通するのは、労働者階級が資本主義的搾取から解放されて、生産・経済の主人公」になることです。社会的生産」の目的が剰余価値・利潤の極大化ではなく、勤労人民の生活向上におかれるようになります。勤労者の労働権が保障され、労働日短縮が緒にきます。

しかし、社会的所有の確立は一挙かつ全面的に行われるのではなく比較的長期のプロセスとなる、というのが「過渡期」の特徴でしょう。大企業の分野では社会的所有の確立が急がれるでしょうが、中小企業の分野では資本主義的所有の廃止を急ぐ必要はないし、まして、本来的に搾取関係ではない個人・家族的私的所有は広く存続するでしょう。搾取の自由」は残ります。また、商品生

産、市場経済は存続します。しかし、それらに対しては、適切な公的コントロールが行われ、搾取の自由や生産の無政府性」は一定の制約を受けるでしょう。社会的所有に立脚して新生する「社会主義企業」は、生産の目的」と労働生産性をめぐって、残存する資本主義企業や私企業と「競争」することになり、そのことを通じて自らの優位性を実証していかなければなりません。

したがって「過渡期」は、経済的には「生産手段の複数所有制と市場経済とを通じての社会主義への道」ということになります。

②「過渡期」はグローバルに進行するでしょう。20世紀においても、発達した資本主義諸国で社会主義革命が切り開く「過渡期」は、基本的には、極めて不均等に始まることでしょう。しかし、今日進行しているグローバルゼーションから確実に推測されるのは、「過渡期」は急速にグローバルに波及するであろう、ということです。

例えばEUで進行している加盟諸国の政治・経済的統合の進展は、将来における「過渡期」のグローバルな進行の物質的前提を形成しつつある、と捉えることが可能です。中南米諸国における「新しい社会主義」運動の連鎖的進展も、そのような展望を可能にする材料です。それに、現存する「社会主義を目指す国々」の肯定的成果

も加わるかもしれません。改めて、万国の労働者、勤労人民、団結せよ」という国際連帯のスローガンを掲げたものです。

③「過渡期」終了の標識はどのようなものでしょうか。もし「国的規模で考えるなら、政治的には、社会主義を目指す革命政権」にたいする国民的支持が安定すること、国民の大多数が社会主義を目指す政治の主人公として成熟すること、経済的には、生産手段の社会的所有に基づく社会主義的生産諸関係が名実ともに確立し、混合経済」のなかで支配的な地位を占めること、勤労人民の大多数が社会主義を目指す経済の主人公として成熟すること、でしょう。世界的には、社会主義を目指す国々」の総体が世界の政治・経済をリードする状態の出現が考えられましょう。いずれの場合も、「過渡期」はかなり長期に亘るでしょうし、その完了については具体的な諸標識による「判定」が必要となります。

④「体制としての社会主義」の現代的「具体的イメージ「過渡期」の完了は、広義の共産主義社会」の到来を意味しますが、具体的にはその「第一の、低い段階」である「体制としての社会主義」以下、「社会主義」の到来です。「科学的社會主義」の創始者たちが構想した「社会

主義」は未だ実現されていません。それだけに、彼らの構想の基本に立ち戻るとともに、それに「現代的肉付き」を与えることが要請されます。その「社会主義」は、資本主義社会を基本的に乗り越えている」という側面とともに、未だ資本主義社会の母斑を残している」という側面との「二重性」を特徴としている、というのが、マルクス・エンゲルスの基本的見解と思われる。社会主義」は、第一の側面において「共産主義社会の高い段階」である「狭義の共産主義」と共通し、第二の側面においてそれとは区別されるのです。

イ) 社会主義」と「共産主義」との共通性という第一の側面は、「資本主義社会」の肯定的諸要素の継承・発展という点、およびその否定的諸要素の基本的克服と新しい諸要素の確立という点に表れます。

継承され発展する肯定的諸要素としては、人間発達の可能性の拡大、政治的民主主義の発展、高いレベルの生産力・労働生産性・生活、などが考えられます。

根本的に克服される諸要素としては、人間発達の二面性、ブルジョア民主主義」の限界、資本主義的搾取商品としての労働力、生産の推進的動機」は剰余価値の生産・取得、貧富・格差の拡大、失業、恐慌、民族抑圧、戦争、地球・自然環境破壊、などです。

それらに取って代る新しい諸要素は、人間の全面発達、民主主義の徹底、資本家階級の消滅、生産手段の社会的所有制の確立・支配、労働力商品の消滅、勤労人民が経済運営の主人公、生産の推進的動機」は社会的純生産物の生産・取得、失業・貧困の解消、国民の文化的・物質的欲求充足の水準の系統的向上、労働日の短縮（自由時間）の拡大、釣り合いの取れた経済発展、諸民族の友好・共存、恒久平和、維持可能な地球・自然環境保全、などでしょう。

ロ) 社会主義」と「共産主義」との差異性という第二の側面は、それが、あらゆる点で旧社会の母斑をまだ帯びている」マルクスという点にあります。小生はかねてから主張しているのですが、ここでの「旧社会の母斑」は、過渡期」に残存する前・非社会主義的諸要素、たとえば資本主義的・私的所有制」のことではありません。端的にいえば、政治的にも経済的にも「主人公」になった筈の勤労人民、その中核は労働者階級）自身が抱えている、未だ完全には「主人公」に成り切っていない「不十分さ」・欠陥の諸要素を指しているのです。

勤労人民が「政治の主人公」に成りきれていないということは、なによりも、国家や官僚制の残存に現れます。勤労人民が「経済の主人公」に成りきれていないとい

うことは、社会的所有の相対的に独自の諸形態および個人・家族的私的所有が広範に残存すること、勤労人民の労働に無視できない社会・経済的差異が存在すること（精神労働と肉体労働、管理・指揮労働と現場・執行労働、熟練労働と不熟練労働）、人間全面発達を損なう職業的分業、など、労働が生活欲求にならず未だ、生活のための手段」であることから労働に対する「物質的刺激」が必要であること、そのことと生産力・労働生産性の相対的低水準および社会的富・生産物の有限性とが絡んで「労働に応じた分配」という分配方式が必要であること、複数所有制および労働の社会・経済的異質性によって生産者たち「個人および企業労働集団」の労働の「直接に社会的な性格」の発達が不十分であることに起因して商品生産・市場経済の存続が不可避であること、その商品生産・市場経済が生み出す「生産の無政府性」を社会的にコントロールすることを通じて「計画性をもった経済運営」のメカニズムを創出する課題と取り組まねばならないこと「社会主義における市場および計画」のテーマは理論的にも実践的にも未解決の難問題です」などに現れるでしょう。

#### ④「社会主義」から「共産主義」へ

したがって、広義の共産主義社会の低い段階としての「社会主義」の発展そのものが、「狭義の」共産主義への「移行」過程となります。それは、「社会主義」の第一の側面を成熟させること、およびその第二の側面を克服することとの「重の課題に取り組む過程」となることでしよう。「狭義の共産主義」の真髄は、決して、必要に応じた分配」という分配方式の実現に矮小化されるものではありません。21世紀に、「国的規模および世界的規模でこの過程が現実のものとなることを期待したいものです」。

#### IV 河上肇の精神を現代に生かして 21世紀社会主義」を目指す。

「マルクスは生きている」と言えるならば、河上肇は生きている」と言えます。現代に生きる私たちは、河上肇が必ず取り組むであろうと思われる現代の理論的および実践的諸課題と格闘しなければなりません。私は、すでに河上肇よりも長生きしていますが、及ばずながら、21世紀社会主義」論の構築に微力を尽くすとともに、21世紀社会主義」・新しい社会主義」を目指す運動への参加を継続する所存です。ご清聴ありがとうございます。